

# 迷い婚～すべての迷える女性たちへ

2006(平成18)年5月28日鑑賞(ホクテンザ2)

★★★★



監督＝ロブ・ライナー／出演＝ジェニファー・アニストン／ケビン・コスナー／シャーリー・マクレーン／マーク・ラファロ／リチャード・ジェンキンス／ミーナ・スパーリ (ワーナー・ブラザース映画配給／2005年アメリカ映画／97分)

……幼い頃に死亡した母親は、結婚直前に駆け落ちの経験が……。それが1967年の映画『卒業』のモデルだった！ すると私の父親は、今のパパ？ それとも花嫁エレンを略奪した、あのダスティン・ホフマン扮したベンジャミン……？ 主人公、サラの頭は混乱するばかり……。さらに問題は、突撃取材に出かけたサラが、ケビン・コスナー扮する中年紳士に魅かれたこと。これでは、ひょっとすると祖母、母、娘の3世代が、1人の男と「寝て」しまうことに……。1967年と1997年という時空を超えて展開する、父親探しと自分探しの旅の結末は、幸せそれとも不幸せ……？

## 君は『卒業』を知っているか？

1967年にアメリカで公開され、日本でも大ヒットした映画が『卒業』。ダスティン・ホフマン扮するベンジャミン・ブラックが教会に駆けつけ、キャサリン・ロス扮する花嫁エレンを奪い取るシーンは、今でもくっきりと目に焼きついているもの。また、アン・パンクロフト扮するエレンの母親ミセス・ロビンソンが、大学を卒業して故郷パサデナの家に戻ってきているベンジャミンを誘惑するあの有名なシーンも……。さらに、サイモン&ガーファンクルが歌った『スカボロー・フェア』は、団塊世代のおじさんたちなら1度は口ずさんだことのあるはずのメロディー……。この『迷い婚』を理解するためには、あの『卒業』を知っていることが不可欠……？

## パサデナとは？

『迷い婚』の主人公サラ（ジェニファー・アニストン）は、ハッティンガー家の長女だが、ハッティンガー家の人々が生まれ育った故郷は、『卒業』におけるベンジャミンの故郷と同じ、ロス郊外にあるパサデナ。サラの母親はサラが9歳の時に亡くなったため、今パサデナの家には、父のアール（リチャード・ジェンキンズ）、祖母のキャサリン（シャーリー・マクレーン）、そして妹のアニー（ミーナ・スパーリ）が住んでいる。そして、今サラは婚約者のジェフ・デイリー（マーク・ラファロ）とともに飛行機の中に。アニーの結婚式に出席するため、故郷パサデナに帰るところだ。

父親たちにとってパサデナは最高のまちだが、サラにとっては退屈この上ないまち……。しかし、故郷を離れてニューヨークに住み、ニューヨーク・タイムズの記者として働いてはいるものの、サラの記者としての仕事は冠婚葬祭欄の死亡記事担当だから、何のやりがいも見いだせないもの。そんな状態で、ジェフからのプロポーズを受けて結婚するのも1つの選択だが、それだけでは何か満たされない気持ち……。仕事はこのままでいいのか？ 自分には一体何ができるのか？ 自分の人生とは一体何なのか？ そんなことを考えて悶々とし、スパッと結婚に踏み切ることができず、サラはまさに今「迷い婚」状態にあるわけだ。

そんなサラにとって、妹のアニーがこれからの結婚生活に100%の夢を抱き、何の疑問も持たないまま明るく前向きに進んで行こうとする姿はまぶしくもあったが、ちょっと不可解なもの……？

## 1967年 VS 1997年

『迷い婚』の時代設定は1997年。つまり映画『卒業』の30年後だ。パサデナのまちで実際に発生したあるスキャンダルが小説『卒業』の、そして映画『卒業』のモデルだということは、パサデナのまちでは30年間ずっと「うわさ」され続けてきたもの……。

もし、ベンジャミンがエレンと略奪結婚をした後、女の子が生まれていたとすれば、ちょうどサラと同じ年頃のはず……？ すると、もし『卒業』のモデルが

ハッティンガー家だとしたら、ひょっとしてエレンが死んだ母親……？ そしてミセス・ロビンソンが祖母のキャサリン……？ するとベンジャミンは……？

故郷パサデナに戻っていた悩み多きサラは、祖母キャサリンとの会話の中で、ある驚くべき秘密を聞きつけた。それは、今は亡きサラの母親は、アールと結婚する直前にある男性と駆け落ちをしたことがあるというもの。そして、その数カ月後に生まれたのがサラ。「一体それはどういうこと……？」とサラが悩み始めたところから、この物語は一気に面白くなっていく……。

## 原題も邦題もグッド！

この映画は邦題の『迷い婚～すべての迷える女性たちへ』もピッタリだが、原題の『Rumor has it …』も実にグッド！ 「Rumor」とは「うわさ」だが、「Rumor has it ○○」で、「○○といううわさだ」という文章になる。その「うわさ」とはもちろん、映画『卒業』に登場する最も有名なエレンがベンジャミンと駆け落ちするシーンにもとづく「うわさ」。そりゃ映画はあれでカッコ良かったが、その後の現実を冷静に考えていくと、教会に取り残された新郎はたまったものではない。エレンとベンジャミンもその情熱の赴くままの行動がその後ずっと続くかどうかは怪しいもの……？ したがって現実には、どうもエレンはベンジャミンと1度は駆け落ちしたものの、やはりベンジャミンを諦めて新郎の元へ戻り、娘を生んだのかもしれない……？ パサデナのまちでは、そんな「うわさ」が30年間ずっと語り継がれていたから、この『迷い婚』は、そんな実際の「うわさ」にもとづく物語……？

## ベンジャミン・ブラック (B.B.) = ボー・パローズ (B.B.) ……？

小説『卒業』を書いたのはチャールズ・ウェッブだが、それはチャールズの親友であるボー・パローズのある体験を基に書いたものらしい……？ すると、1967年の映画『卒業』で、ダスティン・ホフマン演じたベンジャミン・ブラックは、1997年の今はケビン・コスナー演ずるボー・パローズのこと……？ しかし、もしそうだとすれば、母親はなぜボーと別れて父、アールの元へ戻ってきたのだろうか？ そして、その頃に生まれた私の父親は、ひょっとしてボー……？

インターネット事業で大成功を収めたポーは、今、サンフランシスコでの講演会の真っ最中。居ても立ってもいられないサラは、バサデナでのアニーの結婚式が終わると、ニューヨークへの帰路の途中、サンフランシスコへ立ち寄って、ポーへの「突撃インタビュー」を敢行しようと決意した。こんなサラの気持を察した、誠実でクールな弁護士である婚約者のジェフも、サラの行動に協力。適宜、状況報告をするように、と言い残して2人は別れたが……。

## 「親子ドンブリ」プラス・ワン……？

サラの突撃インタビューの結果、幸か不幸か「ベンジャミン・ブラック＝ポー・バローズ」説が完全に立証されることに……。今や億万長者となっているハンサムで知的な中年紳士のポーは今も独身で、かつてのホリエモンこと堀江貴文氏のように（？）事業に精を出す他、女性関係においても自由奔放に楽しんでいる様子……？ そして、こんな魅力的な紳士なら、寄ってくるオンナはいくらでもいるはず……。

サラがサンフランシスコに立ち寄って、ポーと会おうとしたのは、要するに①「私の母親と駆け落ちしたのは本当にあなたか？」、そして②「ひょっとして私の父親はあなたか？」ということを確認するため。その回答は①はYesだが、②はNo。さて、その根拠は……？

そのネタばらしはここではできないが、その回答が明らかになれば、サラはすぐにその場を後にしてニューヨークのジェフの元へ帰るべきことは明らか。ところがサラは、この魅力的な中年紳士から食事に誘われたり、パーティーに誘われたりしているうちに、何となく怪しげな雰囲気……。

その結果、サラが翌朝目覚めたのは、何と超豪華なポーの自宅のベッドの上……。こりゃ、ヤバイ……。

こうなると、驚くべきことに、ポーは駆け落ちした母親と「寝た」のみならず、その母親のミセス・ロビンソン＝キャサリンとも「寝た」ことになるうえ、その娘のサラとも「寝た」ことに……。下品な表現で恐縮だが、「親子ドンブリ」という話は世上まれにあること……。しかし、「親子ドンブリ」プラス・ワンすなわち、祖母、母、娘の3世代制覇とは、まさに偉業……？

## 理性か、それとも情熱か……？

ボーとのキスを望んだのは自分の方から……。そう自覚しているサラは、「理性」のうえでは早くボーと離れ、ジェフの元へ帰らなければと考えているのだが、どうも「情熱」の方がそれに勝ってしまうため、どうしようもない状態……。 「早く帰る」と言っていたのに、「最後にパーティーだけ。そして、パーティーが終われば車で空港まで見送る」とボーから言われたサラは、今、真新しいイブニングドレスに身を包んで、ボーといいムードで踊っていた。こんなやましい状態(?)にあったため、ジェフから言われていた、「適宜、状況報告」をしていなかったのがサラの運のツキ……？

いくらケイタイにかけても出てこない状況に業を煮やしたジェフは、遂に1人、サンフランシスコへ。そして今、ジェフの目の前にあったのは、身も心もボーに委ねきり、うっとりとした表情でボーの腕の中にあるサラの姿。ジェフは真面目で誠実、そして一本気な男だけに、こりゃまずい……。必死で弁明しようとするサラだったが、「寝たのか？」との質問への回答は……？ さらに、「今すぐ俺と結婚するか？」との質問への回答は……？ この修羅場における2人のやりとりは、やはりアメリカ的で何とも面白いものが……。

## 「All is over」……？

女性が、自分のことを誰よりも見守ってくれている本命の男ではなく、一時の迷いでハンサムなプレイボーイの魅力に惹かれることはよくある話……。また、そんな一時の「火遊び」が本命の彼にバレたため、「すべてが終わった」と嘆くのもよくある話……？

私が知っている限り、そんな話における最高の名場面は、オードリー・ヘップバーンが主演した『戦争と平和』（56年）において、アンドレイを裏切り、プレイボーイのアナトルと駆け落ちした、オードリー・ヘップバーン扮するナターシャが、ピエールを前に「All is over」と激白するシーン……。

今、自分の目の前を立ち去っていくジェフの姿を見たサラは、まさにこのナターシャと同じ心境だったはず……？ ニューヨークのジェフの元へ戻ることがで

きないサラが、失意のまま戻ったのは、パサデナにある父親の家。ところが、ここでもアニーをめぐる大騒動が……？

## ハッティンガー一家の大騒動に見る人間性とは……？

アニーをめぐる大騒動とは、アニーが新婚旅行中、突然呼吸困難になったこと。今、アニーはベッドの上でサラと話をしたいとさかんにアピールしているが、それは一体何のため……？

そしてまた、サンフランシスコにおけるボーとの出会いによって、重要な調査結果を得るとともに取り返しのつかない体験をしてきたサラは、祖母のキャサリンに対して、また父親のオールに対して、そして妹のアニーに対して、どこまで真相を語るのだろうか……？

そんなこんなで大騒動をしているハッティンガー一家の前に停まった車は、何とボーの車。ボーの姿を見たキャサリンは、「あのゲス野郎！」と口走りながら、玄関から外へ出ていったが……？ さあこんな大騒動の中、ハッティンガー家の人たちからは、それぞれどんな人間性が見えてくるのだろうか……？

## 最後のドンデン返しは、「あり」それとも「なし」……？

サラの本命の彼はジェフ。もともとそれはサラにもわかっているはずだが、そう単純に割り切れないため、さまざまな悩みを抱えていたもの。しかし、今や最悪の事態となり、やっとサラにも自分にとって1番大切な人が誰であったかがはっきりすることに……。そこでサラがとった行動は、ニューヨークへ飛び、再びジェフと会うこと……。

「何を今さら。盗人猛々しい」と日本人の私などはつい思ってしまうが、アメリカ的な合理主義はどうもそうではないらしい……。思いきってジェフの部屋のドアをノックしたサラだったが、さてドアは開くのだろうか……。そして、さて最後のドンデン返しは「あり」、それとも「なし」……？

2006(平成18)年5月29日記